

令和 2 年 6 月 26 日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02108

研究課題名（和文）変遷的真理に基づく時間的实在論の再構築

研究課題名（英文）Reconstruction of Temporal Realism Based on Fugitive Truth

研究代表者

加地 大介（Kachi, Daisuke）

埼玉大学・人文社会科学部研究科・教授

研究者番号：50251145

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、時間的生成を实在の根幹的な存在様相として認定する「時間的实在論」の形而上学的理論を、真理が時点に依存して変動し得ると考える「変遷的真理」の発想に基づきながら、近年にわかに進展してきた「真理付与の理論・真理付与者意味論・命題論」などの真理論的研究の最新の動向に基づく成果を取り入れることによって再構築することを試みた。

その結果、実体的対象の「純粹生成」としての持続（耐続）を時間的生成の根幹に位置づけるとともに、時間的实在論における真理の時間性を、非指標的文脈主義のひとつの帰結として解釈した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「時間的实在論」は、1960年代にA.N. プライヤーによって明確に定式化され、彼に賛同する言語哲学・論理哲学・哲学的時間論の研究者たちによって継承されてきたが、必ずしも見解の一致が得られていない論点がいくつか残っていた。本研究では、実体的対象を基礎的存在者として措定する実体主義的存在論によって時間的实在論を根拠づけるとともに、言語哲学的・論理哲学的には、時間依存的な真理を非指標的文脈主義からの帰結として实在論的に特徴づけることによって、時間的实在論をさらに強化・一般化することができた。

研究成果の概要（英文）： This research attempted at reconstructing 'temporal realism', which takes temporal becoming as an ontologically fundamental feature of reality, based on the concept of 'fugitive truth', which admits that truth can be time-dependent. For that purpose, this researcher employed the results of the recent researches on the theories of truthmaking, truthmaker semantics and propositions.

As a result, this researcher found the ground of temporal becoming in the 'pure becoming', which stands for the endurance of substantial objects. Besides, he realistically characterized the temporality of truth as a consequence of the non-indexical contextualism.

研究分野：哲学

キーワード：实在論 実体主義 時間 生成 持続 真理

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

真理の時点依存性の主張や時間的生成を重視する時間的实在論(temporal realism)を現代において最初に最も明確な形で表明したのは、A.N.プライアーである。彼は、1950-60年代に時制論理を創始・展開した際に、その哲学的基礎づけの一環としてこれらの立場を提唱したのであった。

その後、時制表現の意味論について研究する言語哲学、時制論理から発展した時間論理研究などの哲学的論理学、現在主義に代表される哲学的時間論などにおいてプライアーの主張は継承され、一定の進展を果たしたが、真理の時点依存性の根拠、未来の偶然性を処理する論理的方法、過去と未来の存在論的非対称性の解釈などにおいて必ずしも見解の一致を見ていなかった。

こうした中、近年になって言語哲学・哲学的論理学・形而上学の各分野において真理にまつわる新たな視点が提示され、それをきっかけとした時間的实在論の内部での論争が隆盛していた。

言語哲学においては、J.マクファーレンが評価時点による真理値の変動を認める真理の相対主義を提唱したのに対し、H.カペルンと J.ホーソンは真理の絶対主義を保持した形での真理値の変動可能性を主張し、B.プロガートは両者の中間的な形で真理値が変動可能だと考える時間主義(temporalism)を提唱した。また、K.ファインや S.ヤプロは、真理条件ではなく真理付与者によって命題の真理値を確定する真理付与者意味論(truthmaker semantics)を提案した。

哲学的論理学においては、未来の偶然性を時点の分岐モデルによって処理する陣営と、直線モデルを保ちつつ真理値空隙(truth-value gap)や仮の(prima facie)未来などによって処理する陣営との対立に改めて焦点が当てられていた(F.コレリアと A.イアコナなど)。

形而上学においては、近年にわかに隆盛してきた真理付与者の理論を視野に入れながら、現在のみに实在性を認める T.メリックスらの現在主義と過去と現在の实在性を主張する P.フォレストらの成長ブロック説の対立があった。

本研究代表者は、修士論文「時間と真理：現代論理学における真理概念の無時間性についての批判的考察」(1986)以来、真理を時点依存的に捉えるべきであることを一貫して主張しており、科研費(基盤 C)による研究「時間論理にもとづく形式存在論」(2001-03年度)などにおいて一定の成果をすでに得ていた。

具体的には、真理値空隙を許容する単純部分論理 SPL を時点相対化した論理体系にもとづいて時制主義的な存在論を構築する方法を提示した。さらに、タイムトラベルの可能性と時間生成の实在性などの具体的な時間論的諸問題についても考察した。前者については、実体の持続に即した形で実在する過去と実在しない未来という区別を行い、少なくともパラドクスを引き起こし得るような過去へのタイムトラベルは不可能であることを示した。後者については、実体の純粹生成(pure becoming)によってもたらされる可能性から必然性への変化に時間的生成の实在性の根源を見出した。

しかしこれらの成果は、どちらかと言えば個々の問題に即した個別的なアプローチに基づくものであり、それらの基礎となる時間的实在論の統一的な理論化がなされていなかった。また、真理の時点依存性の根拠づけに関していくつか不十分な点が残っていた。本研究は、こうした欠点を克服するため、主として真理付与関係に基づく意味論と存在論に即したより一般的かつ根本的な観点を採用することによって、これまでの成果の再吟味を行うとともにその精密化と一般化を試みるものであった。

2. 研究の目的

本研究は、真理が時点に依存して変動し得ると考える「変遷的真理(fugitive truth)」の発想に基づきながら、時間的生成を实在の根幹的な存在様相として認定する「時間的实在論」の形而上学的理論を再構築することを目的とした。このような立場は、1960年代にプライアーによって明確に定式化され、彼に賛同する言語哲学・哲学的論理学・哲学的時間論の研究者たちによって継承されてきたが、必ずしも見解の一致が得られていないいくつかの係争点が残っていた。本研究では、近年になってにわかに進展してきた真理付与(truthmaking)の理論・真理付与者意味論・命題論などの真理論的研究の最新の動向に基づく成果を取り入れることによって、そうした係争点についての決着を目指すと同時に、時間的实在論のさらなる強化・一般化を企てた。

3. 研究の方法

存在論的観点と真理論的観点のもとで、時間的实在論の再構築を試みた。

(1) 存在論的観点

実体的対象を基礎的存在者とする実体主義的存在論によって、時間的实在論を根拠づけることを試みた。

そのために、まず、時相(aspect)を実体的対象(substantial object)の持続(耐続)のモードとして性格づけた。具体的には、その性格づけに基づいて構成される「プロセス論理(process logic)」の骨子を提示したうえで、同様に時相の論理として構成された A.ガルトンの「できごと論理(event logic)」との異同を通して、その主たる特徴を描き出した。

また、実体的対象の持続を多世界説的な世界像のもので貫時点同一性として規定したうえで、さらにその貫時点同一性を R.テイラーが提案した「純粹生成」として解釈することにより、存在論的時間性の根幹として実体的対象の純粹生成を位置づけることを試みた。

(2) 真理論的観点

真理の時点依存性については、それが真理評価の時点に依存すると考える、真理についての相対主義者マクファーレンに対し、絶対主義者であるカペルンとホーソン、時間主義者であるプロガートのいずれもその点について異を唱えているが、時制命題の内容そのものは固定されたうえで真理の時点依存性が生ずるのか否かという点については、マクファーレンやプロガートが肯定するのに対し、カペルンとホーソンはそれを否定している。このような異同がどのような事情で発生するのかについて検討した後に、自身の立場を確定することを試みた。

4. 研究成果

(1) 実体的対象の持続様相としてのコブラの時相

『言語をめぐるX章』所収(pp.507-519)の論文「持続様相としての時相」において、存在論的観点から、時相を実体的対象の持続(耐続)のモードとして性格づけた。具体的には、その性格づけに基づいて構成される「プロセス論理」の骨子を提示したうえで、同様に時相の論理として構成されたガルトンの「できごと論理」との異同を通して、その主たる特徴を描き出した。

ガルトンは、それ自体は命題ではない「できごと根(event-radical)」に適用される「時相演算子(aspect operator)」によって時相を表現する「できごと論理」を構成した。彼はその際、本来的に完了的である「できごと」と本来的に未完了的である「状態」という二分法によって時相演算子の適用の可否を規定すると同時に、両者の相違を存在論的な区別としてはなく、どちらかと言えば「記述の方法」という言語的な区別として想定していた。

これに対し本研究代表者は、「状態」をも含む広い意味での「プロセス」をひとつの存在論的カテゴリーとして捉えたうえで、プロセスを表現する述語を「プロセス述語」と呼び、いずれの時相表現もこのプロセス述語と個体定項を結合することによって命題を構成するコブラ的機能を果たすと考えた。その結果として成立する論理体系は、ガルトンの「できごと論理」に代わって「プロセス論理」というべきものとなる。

そして、プロセス論理における各時相コブラは、プロセスに参与する実体的対象における持続の様相の差違を表すと解釈され、それによって過去と未来の本来的な存在論的非対称性も表現することができることを示した。そのうえで、このようにして規定された持続を、様相的観点から、実体的対象の(現在時点における)必然的持続としてのこれまでの持続・現実的持続としての目下の持続・可能的持続としてのこれからの持続という三種類に分類し、それぞれが時相コブラとしての背顧的・現行的・前望的コブラによって表される実体様相としての持続様相の源泉となること、および、これらのうち背顧的持続を源泉とする実体様相が過去様相、前望的持続を源泉とする実体様相が未来様相であり、現行的持続は両者にまたがる境界的な持続であることを主張した。そして、過去様相は本質様相の必然性に対して、未来様相は力能様相の可能性に対して、それぞれ並行性を示すことや、その並行性を反映する形で、過去様相が根拠づける事実様相と未来様相が根拠づける事実様相の論理体系とが、それぞれS4とS4.3となることを示した。

(2) 実体的対象の純粋生成としての貫時点同一性

単著『もの: 現代的実体主義の存在論』を上梓し、その第五章「持続 実体様相の源泉(3a)(3b)」で、実体主義に基づく時間的実在論の詳細を提示した。

その書中の第三章第三節およびその元となった論文「物的対象の自己統一性と質料形相論」では、J.ロウとR.クーンズによる実体の定義を参照しながら、物的対象の自己統一性について質料形相論的観点から検討した。その結果、物的実体を<質料としての力能的外延が実在的定義に基づく形相的統一性によって個体化された「力能的統一性」>として特徴づけた。

そのうえで、実体的対象の持続(耐続)を次のように規定した: 実体的対象の持続とは、複数の「時点」によって構成される時間的多世界モデルにおける、R.テイラーが言うところの「純粋生成」としての貫時点同一性である。ただしテイラーは、純粋生成とは「時間の中に存在するというもののみによってすべてのものが被ると思われる時間上の経過」と説明していたが、本研究では、純粋生成する対象を実体的対象に限定したうえで「時間の中に存在する」ということを「複数の時点において貫時点同一性を保ちつつ存在する」ということとして解釈し、それが同時にテイラーによる「形而上学的意味において歳を取る」ということの意味でもあると主張した。

また最後に、必然性としての過去と可能性としての未来という、持続様相における様相的非対称性がもたらす時間論上の帰結として、逆向き因果や過去へのタイムトラベルの不可能性および時間的方向性・非対称性に関する他の時制主義的立場との異同を、簡略に提示した。さらに、上記のような持続様相は、実体に関する他の源泉に由来する本質様相・力能様相という実体様相と相互連関の関係にあることを主張した。

(3) 非指標的文脈主義としての時間主義

真理の時点依存性については、それが真理評価の時点に依存すると考える、真理についての相対主義者マクファーレンに対し、絶対主義者であるカペルンとホーソン、時間主義者であるプロガートのいずれもその点について異を唱えているが、時制命題の内容そのものは固定されたうえで真理の時点依存性が生ずるのか否かという点については、マクファーレンやプロガートが肯定するのに対し、カペルンとホーソンはそれを否定している。このような異同がどのような事情で発生するのかについて検討した結果、次のような事情が判明した。

命題の文脈依存性について、カペルンとホーソンは、命題に含まれる指標的表現による命題内容の文脈依存性しか認めていないため、そのような文脈依存性を取り除けば真理に関しては絶対主義の立場を保持できると考えたのに対し、マクファーレンやプロガートは、それに加えて、固定された命題内容に対して付与される真理値が文脈依存的となる場合も認めているため、真理の時点依存性を主張している。そのうえで、そのような文脈依存性に基づく真理の非指標的文脈主義の立場を採用したのがプロガートであるのに対し、それよりもさらに徹底した文脈依存性としての評価依存性をも加えて導入した結果として真理の相対主義を主張したのが、マクファーレンである。

現時点では、上記のような判定に基づきつつ、基本的にはプロガートの立場である時間主義の立場に立脚したうえで、そのような形での真理の時点相対化に対して提示された、カペルンとホーソンによる不必要性の主張とマクファーレンによる不十分性の主張との双方の妥当性について検討し、それらに対する反駁を試みる論文を作成しているところである。このような考察によって、時間的実在論を真理論的な観点のもとでより強固に根拠づけることができると考えている。

(4) 実体的対象としての穴

上記のような時間的実在論の基盤となっている実体主義的存在論のひとつの応用事例として、実体的対象の一種と考えられる「穴」についての存在論的・因果論的考察も行った。

代表的力能実在論者である S.マンフォードの来日に際して彼を囲んで開催された、「無」をテーマとする国際ワークショップ Tokyo Philosophy Project (Mumford Meeting)(2017年5月15日)での招待講演「The Reality of Holes」に基づく論文「穴の物象性と因果性」では、マンフォードと R.L.アンジユムの力能実在論に基本的に与しながらも、彼らによる不在因果の非実在性の主張に異を唱え、致命的真空や穴にまつわるいくつかのできごとを、実体的対象としての真空や穴の力能によって引き起こされる単称的・実在的因果関係によって解釈すべきであると主張した。

また、書評『パラフレーズ』の方法を用いた『消去主義』の存在論において、柏端達也が自著『現代形而上学入門』の第二章で拙著『穴と境界』(春秋社、2008)を批判して展開した穴の非実在性と回転可能性の主張に対して、柏端の議論におけるいくつかの問題点を指摘しながら反論した。

(5) 分析形而上学研究についての解説

本研究が属する研究分野としての「分析形而上学」について、いくつかの解説を行った。

ブックガイド「形而上学からの分析哲学」では、特に形而上学に関連の深い分析哲学の諸分野における入門書・概説書の紹介を行った。コラム「アリストテレスと IT」では、哲学における「存在論」と情報工学における「オントロジー」とを関連づけた。研究紹介「現代的実体主義の形而上学」では、本研究代表者が分析哲学的手法によって展開している、現代的な実体主義に基づく形而上学研究の概要について紹介した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 加地 大介	4. 巻 46-6
2. 論文標題 形而上学からの分析哲学	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 16-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加地 大介	4. 巻 45(21)
2. 論文標題 穴の物象性と因果性	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 70-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加地 大介	4. 巻 52(2)
2. 論文標題 物的対象の自己統一性と質料形相論	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 埼玉大学紀要（教養学部）	6. 最初と最後の頁 97-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Daisuke Kachi
2. 発表標題 The Reality of Holes
3. 学会等名 Tokyo Philosophy Project（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 加地 大介	4. 発行年 2018年
2. 出版社 春秋社	5. 総ページ数 400
3. 書名 もの：現代の実体主義の存在論	

1. 著者名 河正一・島田雅晴・金井勇人・仁科弘之 編	4. 発行年 2017年
2. 出版社 埼玉大学教養学部・人文社会科学研究所	5. 総ページ数 584
3. 書名 言語をめぐるX章：言語を考える、言語を教える、言語で考える	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<ul style="list-style-type: none"> ・書評『現代形而上学入門』（柏端哲也 著）「『パラフレーズ』の方法による『消去主義』の存在論」、図書新聞（3335）3 - 3（2018年1月20日付） ・コラム「アリストテレスとIT」、埼玉新聞「経済コラム：研究者の眼」no.231（2019年7月26日付） ・研究紹介「現代の実体主義の形而上学」、『埼玉大学研究マップ 70th 教員と研究の紹介』（http://www.saitama-u.ac.jp/research_map/html5.html#page=33） ・researchmap （https://researchmap.jp/kachi/） ・SUCRA （http://sucra.saitama-u.ac.jp/modules/oonips/）

6. 研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考